



Data

監督・撮影：木村大作
 原作：新田次郎『劔岳 点の記』（文春文庫刊）
 出演：浅野忠信 / 香川照之 / 松田龍平 / 宮崎あおい / 仲村トオル / 役所広司 / 小澤征悦 / 井川比佐志 / 國村隼 / 笹野高史 / 夏八木勲

👁️👁️ みどころ

CGなし！ヘリなし！俳優もスタッフも荷物を担いで山登り。「これは撮影ではなく行（ぎょう）だ」と宣言して挑んだ映画が、ここに完成！新田次郎文学の真髄を、カメラマン一筋の人生を歩んできた木村大作が、徹底したこだわり心を持って初監督。そりゃすごい「絵」になるはずだ。壮大な自然とそれに挑むちっぽけな人間たちの壮絶なドラマを、タツプリと堪能しよう。

* * * * *

もっとも映画になりにくい小説が映画に

私は作家新田次郎の名前はもちろん知っていたが、彼が気象学者だったとは知らなかった。また、265万部を越すベストセラーとなっている『国家の品格』の著者藤原正彦が、新田次郎の息子とは知らなかった。それを知ったのは、プレスシートに「父新田次郎の小説には、山や歴史に場面を借り、そこで懸命に生きる人間達を描いたものが多い」との書き出しで始まる彼のコメントがあったため。

そこで面白いのは、彼は父親の作品について「それらの作品には殺人もなければ派手な活劇やベッドシーンもない。ただひたすらそのような人々に光を当て続けることで、永遠の自然と夢のように儂い人生の対比をじんわりと浮び上がらせる。もっとも映画になりにくい小説と言えよう」と見つけたうえで、「とりわけ『劔岳 点の記』はそうだから、映画化と聞いた時はわが耳を疑った」と評していること。

カメラマンとして過去数多くの功績を残してきた木村大作が新田次郎原作の『劔岳 点の記』に目をつけたのは、2006年2月とのこと。1939年生まれの「伝説の活動屋」木村大作が本作の撮影に挑むスタンスは、CGなし、ヘリコプターなしで、俳優・スタッ

フはすべて自分の足で荷物を担ぎ劔岳を登ること。つまり、「撮影というより行(ぎょう)そのもの」と木村監督が宣言したとおりの過酷な撮影条件をクリアすることによってはじめて、「もっとも映画になりにくい小説」が映画になるわけだ。したがって、テレビドラマの延長のような安易な映画づくりが目につく近時の邦画界の中で、本作が「こだわりの一作」であることはまちがいない。

さあ、そんな最高のこだわりの中で完成した、過酷な自然の中で過酷な任務に挑む主人公柴崎芳太郎(浅野忠信)と宇治長次郎(香川照之)を中心とした2時間19分の間人間的ドラマを、しっかりスクリーンから感じとりたい。

行(ぎょう)のサマは「日本魅録」からも

CGを使わないことは、新田次郎原作を映画化するについての木村監督の絶対的なこだわりだと理解できるが、機材を運ぶためにヘリコプターを使わないことに何の意味があるの?私にはそこらあたりがよくわからないが、こんな過酷な撮影状況を「第一次・木村軍事政權誕生」「音を上げてるのはこの膝かい?」と面白い言葉で表現したのが、『キネマ旬報』に連載している香川照之の「日本魅録」114(2007年12月上旬号)と115(2007年12月下旬号)

これは劔岳における2007年9~10月末の第1次撮影の行(ぎょう)のサマを、木村監督に対する悪口雑言の限りを尽くして(?)表現した悲鳴のような文章だが、これぞまさに俳優香川照之の本心!よくぞまあ、こんな気狂いじみた撮影を敢行したものだ。森谷司郎監督、木村大作撮影の『八甲田山』(77年)もすごかったが、本作はそんな撮影風景のリアルさを香川照之の文章で事前には知っていただけにもっとすごい。そんな監督に見初められた香川照之も浅野忠信も、そして香川照之の親友仲村トオルも大変!

数々の美しいシーンはカメラマン一筋で過去50作もの映画を撮影してきた木村大作監督の面目躍如たるもの。しかし他方、一行が雪崩に襲われるシーンや信(松田龍平)が転落するシーン、そして吹雪や豪雨のシーンの撮影はまさに危険と隣り合わせの地獄絵図。滅多に見ることのできないそんなホンモノの映像を、本作でじっくりと堪能したい。

官僚主義・縄張り主義の弊害はあの時代から

明治から100年以上続いてきた官僚支配の弊害があちこちに露呈し、公務員改革の必要性が叫ばれながらそれが遅々として進まないのは、霞が関の中央官僚たちの抵抗が根強く、かつ政治家たちのリーダーシップが不足しているため。私の大好きな作家司馬遼太郎は『坂の上の雲』で、明治時代そして日露戦争時代の日本型官僚システムや軍人養成システムが有効に機能していたにもかかわらず、それが大正から昭和にかけて崩壊したため、あのバカな日中戦争から太平洋戦争に突き進んでいったことを明らかにしたが、本作における陸軍参謀本部陸地測量部のお偉方の姿を見ていると、明治39~40年頃既に官僚主

義と縄張り主義の弊害がありありと。

他方、郵政民営化に対する揺り戻しを含めて、現在は「質素で効率的な政府」「民にできることは民に」というスローガンにかけりが見えるが、明治40年頃の山登り技術にかけては陸軍の威信をかけた陸地測量部よりも、創設間もない民間の日本山岳会の方が優秀そう。山登りには体力や根性も必要だが、それ以上に大切なのは登山道具。小島烏水(仲村トオル)率いる日本山岳会が備える装備は、そのほとんどがヨーロッパから取り入れた最新のもの。そのうえ、案内人に支払う日当も陸地測量部より日本山岳会の方が高いらしいから、彼我の装備の差は明確だ。ところが、陸地測量部のお偉方はそんなことは無視し、ただ「陸軍の威信にかけて」とハツパをかけるのみ。こんな姿を見ていると、太平洋戦争中にすっかり定着してしまった悪しき精神主義がこの時期から既に始まっていたようだ。

もっとも本作では、劣悪な装備条件下で劔岳への登頂と測量という任務のために必死に働く柴崎らに対して、ラストでは「登るだけが目的の私たちとは違う」と理解を示す小島たちとの間に信頼関係が生まれてくるから、官民対立のほころびは露呈しない。それが、せめてもの救いだが・・・。

劔岳にはバッハとヴィヴァルディがお似合い

本作は、柴崎に対して「陸軍の威信にかけて、劔岳の初登頂と測量を果たせ」と命令する陸軍参謀本部陸地測量部の大久保徳昭(笹野高史)や矢口誠一郎(國村隼)のお偉方や、柴崎の友人の玉井要人大尉(小澤征悦)が登場し、日露戦争大勝後の明治39~40年当時の日本陸軍の姿が描かれる。また、劔岳の測量と登頂に挑むが、登頂を断念した経験を持つ前任の測量手古田盛作(役所公司)から柴崎が教えを受けるシーンや、愛妻葉津よ(宮崎あおい)との心の交流を描くシーンなども登場する。しかし、これらは柴崎の劔岳での任務を描くためストーリー構成上必要最小限にとどめ、スクリーン上は劔岳に挑む男達のシーンがそのほとんどを占めているのが本作の特徴。

そこで難しいのが音楽だが、何と映画全編に流れるのは、バッハやヴィヴァルディなどのクラシック音楽。ヴィヴァルディの『四季』は多分、モーツァルトやベートーベンの数々の名曲以上に日本人に愛されているクラシック音楽。その『冬』『春』『秋』などの耳に残る旋律が、劔岳の美しくも厳しい自然と、男達の過酷な闘いにマッチしているから不思議だ。しかもこれは、既存の演奏の二次使用ではなく、演奏会場で映画のフィルムを流しながら、仙台フィルハーモニー管弦楽団の生演奏を録音したというからビックリ。

こんな風に大切に自分の音楽を使ってくれたら、バッハもヴィヴァルディもお墓の中で大喜び?

2009(平成21)年4月24日記